

コラム

外国籍市民とともにつくる社会へ

し ぶ や ま き
渋谷 真樹 さん

現在、日本には212万人を越す外国籍の方々が暮らしています。これは実に、60人に1人にあたります。奈良県には約11,000人の外国籍住民がおり、日本国籍をもちながら外国にルーツがあるという人々を加えると、その数はもっと多くなります。私の勤務する大学にも、留学生はもちろん、在日コリアンや幼少期に家族と来日した学生などが在籍し、切磋琢磨しています。

海外に住む日本人も多くいます。親の勤務等で海外に暮らす子どもの数は、義務教育段階だけでも7万7,000人にのぼっています。

このように、国籍や民族の異なる人々が共に暮らす状況は、いまや世界各地でごく日常的な風景になっています。ちなみに、この2年連続で、私の教え子がマレーシアの日本人学校に就職しました。この夏、彼女達を訪ねてきました。大きなモスクにも感動しましたが、同じ通りに中国寺院とヒンズー寺院が並んでいるのにも驚きました。聞けば、マレーシアには、マレー系だけでなく、中華系、インド系、そして、1万人ほどの日本人が住んでいるそうです。カレーのような中華のような、滋味深い土地のお料理は、こうした多文化の中で生まれたのですね。

かつて、アメリカの社会は、さまざまな具材が煮とけたシチューにたとえられました。最近では、それぞれの野菜がそれぞれの味わいや歯ごたえを残した、サラダボウルのようだと言われます。

さて、私達は、さまざまな文化的背景をもちよって、どのような奈良、そして、日本をつくっていくのでしょうか。異なった人を非難したり、排除したりすることは、相手を傷つけるだけではなく、いずれ自分自身を息苦しくすることでもあります。私達ひとりひとりが、すでにもう、国境を越えて依存しあう時代を生きているのです。多様であることが、強みであり、豊かさであることを、ひとつひとつ確かめていきましょう。

Profile



奈良教育大学教授。東北や関東を転々とした後、2000年から奈良教育大学に勤務。お茶の水女子大学大学院博士課程修了。ロンドン大学で3年間研究した。専門は異文化間教育で、多文化社会に生きる子ども達の教育について研究している。最近の著書に、『「往還する人々」の教育戦略』、『日本の外国人学校』（ともに明石書店）がある。



レビュー ◆本の紹介◆

『さようなら、オレンジ』

岩城 けい著 筑摩書房



**異郷で言葉が伝わること——
 それは生きる術を獲得すること。尊厳を取り戻すこと。**

自分が生きる道をつかみたい…。故国を遠く離れ、子どもを抱えて暮らす女性たちは、たがいに支え合いながら、各々の人生を切り開いていく。

オーストラリアの田舎町に流れてきたアフリカ難民サリマは、夫に逃げられ、精肉作業場で働きつつ二人の息子を育てている。母語の読み書きすらままならない彼女は、職業訓練学校で英語を学びはじめる。そこには、自分の夢をなかばあきらめ夫について渡豪した日本人女性「ハリネズミ」との出会いが待っていた…。